

宮崎経済の動きがここでわかる!

[文字のサイズを変更する](#)

[検索](#)
[ホーム > フォーカス > 林業の未来図\(4\)](#)

フォーカス

林業の未来図(4)

[ツイート](#) 0

[いいね!](#) 5

2013年01月29日

連携 永続的な産業を目指して

山の現場を少しでも支えようと、知恵を絞って林業新技術の研究にいそしむ行政・研究機関があり、次世代を担う子どもたちに木の良さや山を守ることの大切さを伝えようと“木育”に力を入れる青壮年たちがいる。連携を深め、ネットワークを広げながら活動を続ける彼らの願いも、「林業・木材産業の明るい未来」だ。

宮崎発信の独自技術

美郷町西郷区にある県林業技術センター（森房光所長）で、スギ苗の植栽作業の効率化や労力分散化を目的に、2008年から始まった研究。試行錯誤の末に10年、実用化されたその新技術に付けられた名は「Mスター容器（M-StAR Container）」。さまざまな段階で調節ができる筒状容器を使った育苗技術で、「Multi-Stage Adjustable Rolled Container（多段階調節型筒状容器）」の単語の頭文字を取って名付けられた。「M」には「宮崎」発のオリジナル技術を自負する思いも込められる。製品化して市販されており、北海道から沖縄まで、民有林を中心に普及しつつあるという。



「Mスター容器」の特徴を説明する三樹さん。「巻く」という発想からさまざまな可能性を開いた技術となった

Mスター容器で育てた苗は、畑で育てる従来の苗と比べて、根に特徴が現れる。畑で育てると掘り返すときにいくら気を付けていても根に傷が付く。そうなると、傷の回復も考慮して「春植え」という言葉があるように植栽する時期が限られてしまう。容器苗は根の損傷が少なく、年中植えられる。つまり、木の伐採後、すぐに植えることもできるということで、春だけに集中して行っていた植栽労力の分散化にもつながる。

従来の苗は根が広がっているため、植える穴も大きく掘らなければならないが、容器苗は小さな穴でよく、作業効率も上がる。また、根が渦状にならない工夫が施されているため、活着率（植栽後に根付く割合）が高い。同町内の試験地で行った実験では、降雨量にも影響されやすい従来の苗の活着率が60%程度にとどまった一方、容器苗は90%以上の実績を挙げたという。根付く確率が上がるということは、植栽本数の削減につながる。スギは標準で1ヘクタール当たり2500本を植えるが、容器苗なら2000本ほどに減らせる。効率的な作業の実現を目指す研究の成果が確実に表れている数値と言えそうだ。

「巻く」というアイデア

Mスター容器の研究が始まった同じころ、国も「マルチキャビティーコンテナ」という一体型の容器を使った容器苗の技術開発を始めたが、同センターは独自技術にこだわった。そのこだわりが、片面だけが波形になっているシートを卷いて利用するというアイデアにつながる。

このアイデアは、(1)シートの巻き加減で直径(容積)の調整ができる(2)個々の容器が独立しているので、ト

フォーカス

03月05日
働く女子たちの今(1)

02月26日
ゴルフトーナメントをつくろう！(4)

02月19日
ゴルフトーナメントをつくろう！(3)

02月12日
ゴルフトーナメントをつくろう！(2)

02月05日
ゴルフトーナメントをつくろう！(1)

01月29日
林業の未来図(4)

01月22日
林業の未来図(3)

01月15日
林業の未来図(2)

01月08日
林業の未来図(1)

12月25日
キャリア教育最前線(4)

アーカイブ

2013年03月

2013年02月

2013年01月

2012年12月

2012年11月

2012年10月



Mスター・コンテナで育成したスギ苗の植栽風景。1日当たり1人で植栽できる本数も従来の苗に比べて多くなる=椎葉村内の民有林、2010年11月

レーに立てる際に苗木の配置(密度)を変えることができる(3)シートを開くことができるので根の育ち具合を確認できるなど、マルチキャビティーにない長所ももたらし、全国の民有林から注目されることに。「当初は筒にしなければいけないという固定観念があり苦労したが、『巻く』というアイデアが出たことで革命的な技術になった」と同センター育林環境部特別研究員兼副部長の三樹陽一郎さんは話す。

Mスター・コンテナ苗の出荷は、10年度4000本、11年度には5000本だったが、12年度は5万2000本を、13年度からは県単独の利用促進事業もあって10万本超の出荷を見込む。国有林も含めスギの苗は年350万本が生産されており、コンテナ苗が占める割合は「まだひと握り」(同部)だが、同センターは苗木の成長に関するデータを収集・分析し、従来の手法に比べてトータルで低コストに抑えられるという裏付けを取りながら、県内全域で植え方などに関する講習を開き、普及を図っていきたい考え。三樹さんは「Mスター・コンテナ苗が普及することで、通年植栽が広がれば、労力の分散化や作業効率化に寄与できる。永続的な林業実現の支えになってほしい」と熱い思いを口にする。

全国発信型のイベント

12年11月、宮崎市の若草通りにユニークな形の屋台8軒が登場した。県産杉をPRするデザインコンペ「杉コレクション(杉コレ2012)(同実行委など主催)の一環で、「ひとりじゃやタイ!(いやだい)」をテーマに国内外から応募があった約200点の中から、選考を突破した「魚の骨」や「大根やぐら」のデザインを、県木材青壮年会(木青会)連合会が実物大に再現。多くの市民に県産材のぬくもりと香りを伝えていた。実行委の中心を担う同会会长の大浦秀幸さんは「屋台は自然と人が集まつてくる、皆が笑顔になれる場所。その屋台をまちの中に並べてみようよという発想。スギで作った屋台を通して、みんなを笑顔にできればいいなと考えた」と趣旨を説く。

12年度開催で8回目を数えた杉コレ。毎回違うテーマでデザインを募り、日向や日南市などで開催。一般市民のほほ笑ましい作品から、デザイナーの南雲勝志さんが代表を務める全国的なグループ「日本全国スギダラケ俱乐部」メンバーの本格的な作品まで、さまざまなアイデアが寄せられる。人と人のつながりはインターネットなどを通じて広がり、全国へ発信されるイベントへと成長した。

11年度開催の杉コレ子供部門のグランプリ作品を東日本大震災被災地の岩手県野田村へ贈ったことをきっかけに、本県と同村の絆も深まった。今回からは被災地支援部門を設け、同村の児童らが参加するなど、木のぬくもりを通じたネットワークはますます広がりを見せている。

もともと木工教室開催などを通じて、子どもたちへの“木育”に力を入れ続けてきた木青会メンバーたち。大浦さんは「木はどのように切られ、どのように運ばれるのか。子どもたちにそのことを教えることは、林業県の宮崎にとって重要な意味合いを持つ。教育委員会と連携でき、教育の場を任せてもらえるのならば、私たちの組織のやりがいにもなるし組織の価値も上がっていく」と先を見据える。

県木材市場連絡協議会(仮称)設立へ



宮崎市街地のど真ん中で初めて開催された杉コレ2012。多くの人が本県産材のぬくもりに触れた



日向市東郷町の東郷林産物流通センターで開かれた県森林組合連合会の新春初市。参加者たちの林業再生への願いと活気にあふれた=2013年1月

年の材価低迷が尾を引く形で伸び悩み、約9000円。11年や12年の初市で付けられた1万円強に届かなかつたのが現実だった。

そこで、県内の木材市場(県森連運営や民間を含む)が連携して課題に臨むため「県木材市場連絡協議会」(仮称)を設立する動きが出ている。13年1月29日には宮崎市内のホテルで設立総会が開かれ、規約制定や役員選任が行われる。同協議会の具体的な役割はこれから議論にあらうが、黒木会長は「連携のための素地づくりは少しでも早い方がいい」と話す。

川上(山主)と川下(加工業者)、生産者と消費者、産と官、産地と都市部、大人と子ども…。考え得る限りの連携を模索しながら、林業・木材産業を永続的な産業として守っていこうとする動きがある限り、その未来は明るいものとなる。そう信じたい。

=おわり=

(経済部・鬼束功一)

[ホーム](#) | [ご利用規約](#) | [個人情報の取り扱いについて](#) | [著作権について](#) | [特定商取引法に基づく表記](#) | [お問い合わせ](#) | [サイトマップ](#)

Copyright (C) 2013 Miyazaki Nichinichi Shimbun. All Rights Reserved.

宮崎日日新聞